



Boehringer
Ingelheim



BI PHARMACIST AWARD News Letter 2016



『BIファーマシストアワード』は、薬剤師の先生方の日々の業務を通じて医薬品の適正使用に貢献する優れた国内外での取り組みや研究を表彰するため、日本ベーリンガーインゲルハイムが2010年に創設した表彰コンテストです。

第6回目となる『BIファーマシストアワード2016』のテーマは“シームレスな医療提供の実践～医療機関や地域における薬薬・多職種協働での薬剤師の取り組み～”。選考委員による厳正な1次審査を通過した8組による最終選考会が2016年3月6日(日)に東京国際フォーラムにて開催され、各賞発表および表彰式が執り行われました。

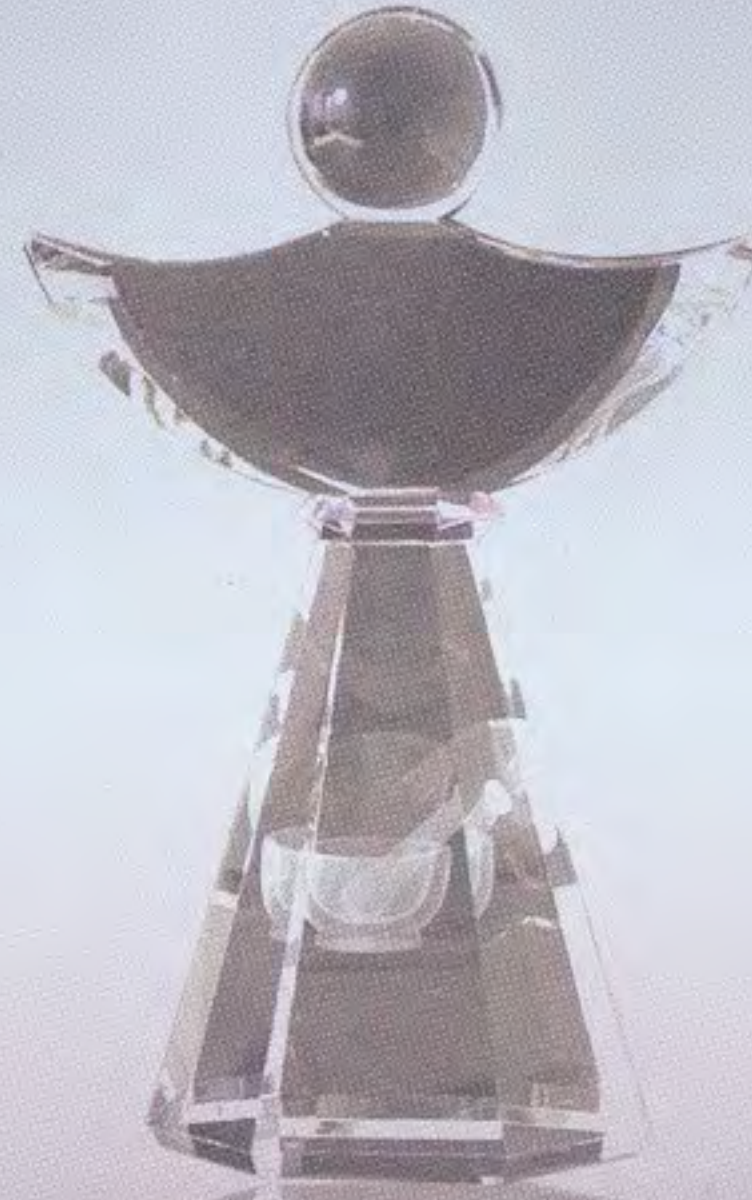
本ニュースレターでは、グランプリ、準グランプリに輝いた受賞作品の概要をご紹介します。

BIファーマシストアワード2016

シームレスな医療提供の実践

～医療機関や地域における薬薬・多職種協働での薬剤師の取り組み～

受賞作品



在宅医療における開局薬剤師の取り組み

長崎薬剤師在宅医療研究会(P-ネット) 中野 正治 先生



在宅医療支援への薬剤師の参画体制情報の整備とシステム構築の評価

JA長野厚生連佐久総合病院 青木 悠 先生



周術期口腔機能管理件数増加に向けたチーム医療による取り組みと今後の課題

株式会社日立製作所日立総合病院 四十物 由香 先生

急性期中小病院における薬薬連携の取り組み

社会医療法人 青嵐会 本荘第一病院 佐々木 のり子 先生

抗MRSA薬を用いた治療に対する薬剤師のシームレスな介入がもたらす
臨床効果及び医療経済効果

徳島大学大学院医歯薬学研究部 臨床薬学実務教育学 岡田 直人 先生

保険薬局薬剤師と病院薬剤部薬剤師が協働で外来患者の薬物療法を
より安全で有効なものとするための方法

医療法人育和会 育和会記念病院 久岡 清子 先生

院外処方箋を利用した薬薬連携 ～検査値表示による効果・変化～

千葉大学医学部附属病院 薬剤部 横山 威一郎 先生

安全で安心ながん化学療法に向けた多職種連携の取り組み

東北大学病院 菊地 正史 先生

BIファーマシストアワード
選考委員(五十音順)

伊東 明彦 先生 明治薬科大学 教授
生出 泉太郎 先生 公益社団法人日本薬剤師会 副会長
奥山 清 先生 一般社団法人東京都病院薬剤師会 常任理事、
東京医科大学八王子医療センター 薬剤部長
藤垣 哲彦 先生 一般社団法人大阪府薬剤師会 会長
堀 美智子 先生 一般社団法人日本薬業研修センター 医薬研究所所長、
医薬情報研究所 株式会社エス・アイ・シー 取締役
古来 啓蔵 日本ペーリンガーインゲルハイム株式会社 執行役員

講評

BIファーマシストアワード2016 選考によせて

明治薬科大学 教授 伊東 明彦 先生



選考委員を代表して私から講評を述べたいと思います。

今回で6回目を迎えたBIファーマシストアワードは、テーマを「シームレスな医療提供の実践～医療機関や地域における薬薬・多職種協働での薬剤師の取り組み～」として募集し、20演題を超える応募をいただきました。最終選考を通過し、本日発表いただいた8演題はまさに時宜を得た取り組みであり、熱い情熱を持って活動していることを発表から垣間見ることができました。また患者さん・社会に対する思いが感じられる大変素晴らしい内容だったと思います。

今回、選考にあたって重視した点が3つあります。一つ目は薬剤師が主体的、かつ積極的に取り組んでいる活動か、二つ目は従来にはない新規の取り組みか、三つ目は社会全体に広がり患者さんに還元することのできる将来性のある取り組みか、です。そのため、1地域でしか実現できない特殊な取り組みではなく、その活動が広く浸透していった最終的には患者さんに対し適切な医療を提供する、それを“薬剤師の力でできる”ところを目指していくことが可能な取り組みであることに重きを置いて選考いたしました。

グランプリを受賞された長崎薬剤師在宅医療研究会(P-ネット)中野正治先生のテーマ「在宅医療における開局薬剤師の取り組み」については、まさに薬剤師の主体的・積極的な取り組みとして、今後の医療体制に求められる在宅医療への薬剤師の介入を広げていく継続的な活動であり、発表を通じて“患者さんのために”という熱い情熱が強く伝わってきました。そして患者さんに還元できる薬剤師の活動として高く評価しました。

本日ご発表された先生方には、地域の多くの方々を巻き込んでさらに活動を発展・継続

していく努力を重ねていただいき、今後も患者さんや社会のために貢献していただくことを切に願います。

また、来年のアワードでも多くの先生方の取り組みの成果を拝見することを楽しみにしています。





在宅医療における開局薬剤師の取り組み

長崎薬剤師在宅医療研究会 (P-ネット) 中野 正治 先生



長崎薬剤師在宅医療研究会 (以下P-ネット) は在宅に熱心に取り組む医師の一部から「訪問薬剤管理を薬局に頼んだら断られてしまったが、どこに頼めばいいのか」と相談を受けたのがきっかけで発足した。今後確実に進展することが予想される在宅医療に、果たして開局薬剤師が関われるのか、またそのためにはどのようなスキルやマネジメントが必要かを考え、実績を積み上げることによって信頼を得られるように組織作りや活動を行ってきた。

訪問薬剤管理はその必要性を主治医が認めるところからスタートするものであり、平成15年に長崎市では、医師による在宅医療の取り組みを充実させる目的で「長崎在宅Dr.ネット」がすでに発足しており、P-ネットはそうした動きに呼応するものでもあった。

システムとしては、まず事務局に届いた主治医からの依頼を、事務局はメーリングリストを使ってP-ネットの薬剤師に情報を流し、手上げ方式によって担当薬局を決めていく。ターミナルなどの場合も含めて、いざというときにはサポート薬剤師が赴く場合もあるので、受け入れ先が決まったら、準備をしてサポート薬剤師とも連携を取る。発足当初から在宅医療における必要な研修 (血圧測定等バイタルサイン取得や輸液調整の実技など) を実施するとともに、1人薬剤師でも在宅に対する活動を可能にするため、サポーター薬剤師制度を導入し、24時間対応や遠方への出張時においても対応できるよう相互扶助的な組織作りを図った。同時に、地域連携室等へ広報活動も実施した。

その後、徐々にP-ネットへの依頼が増えるとともに会員独自でも在宅訪問薬剤指導の実績を積み上げていくこととなった。P-ネット組織後は、開局薬剤師が在宅医療へ参入するために必要な研修や様々な職種との連携のあり方について取り組み、サポート薬剤師を設定して不安をなくすようにしていった。

P-ネット会員の受け持った患者数が年々増加して、平成26年には725名を数えたことは、医師や訪問看護師、病院薬剤師、ケアマネジャー等から信頼されてきた証しであろうと思っている。今後は、認知症患者の増加などの新たな状況へのステップアップした対応を心掛けるためにも、研修と地域医療の中での連携をより強化していきたいと考えている。

中野正治先生はここのご発表の後、2016年3月25日にご逝去されました。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。





グランプリ受賞者インタビュー

Q グランプリ受賞おめでとうございます

ありがとうございます。テーマとしてはふさわしいと感じましたので応募しましたが、グランプリをいただくとは思っていませんでした。P-ネット会員と、連携協力していただいた長崎在宅Dr.ネットの先生方をはじめとした在宅医や訪問看護師さん、ケアマネジャーさん、地域連携室の方々などのおかげです。



Q 10年間続けてこれらのご苦労もあったと思いますが

そうですね。ここまで来るにはいろいろとありました。特に、設立した当初に、医師から「薬剤師は在宅医療の中で何が出来るのか」と問われたことは大きかったです。その後は、地道に一つ一つの症例を積み重ねて信頼を勝ち得ていくしかありませんでしたから。初めて在宅患者を受け持つ薬剤師が多かったから、本当に一歩ずつでした。依頼されれば「麻薬を夜中にでも届ける」という心意気でしたが、それぞれが研修や会員同士の情報交換によって学習していき、次第に患者の容態を予測して処方提案ができるようになっていったのではないのでしょうか。世話人会としては、毎月在宅活動に有益な研修会を開き、様々な方々に講師をお願いしています。また、必要書類についての情報を集めたり、会員間で報告書フォームの検討を行ったりもしています。

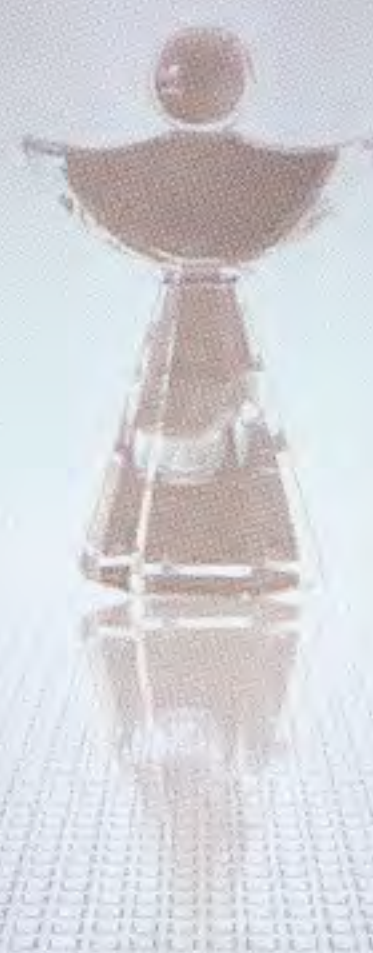
Q 10周年を迎えられて、今後はどのように進めていくご予定でしょうか

実は、積極的に「P-ネットに加わりませんか」と勧誘することをあまりしてはいません。きちんと一定の役割を担い信頼を勝ち得るような薬剤師に、自ら参加していただきたいと思っていますからです。それに長崎市における薬局がすべて在宅薬剤業務を行う必要はないかもしれません。在宅医療を行うドクターと在宅業務ができる薬剤師、患者さんを取り巻く様々な職種の方々がしっかり連携をしていくことが大切であり、それをサポートしていくのがP-ネットの役割と考えています。しかし、後進の育成も当然必要ですので、入会を制限するわけではありません。サポーター薬剤師制度も取っていますので、お互いを信頼できる、サポートし合う関係が構築できる薬剤師に入会して欲しいと考えています。商業ベースではなく、きちんと在宅医療を学んでいこうとする方に。



Q 最後に応募を考えておられる方にアドバイスをいただけますか

まずは、日常の業務をしっかりと実施していくことだと思います。自分の頭で考えて、何が大事かを考えて様々なことにトライしてみてください。そして、仲間を作ること。一人ではへこたれることも仲間がいれば前進できますしね。はじめたら記録を付けていくこと。今回の発表でも、毎年のP-ネット会員の在宅業務の件数がなければ、よく分からないものになったはず。そして、ふさわしいテーマだと思ったときに応募することです。新しいことに挑戦し、継続していれば、ふさわしいテーマの年がありますからね。(ただ狙って獲得できるものでもありませんから。)



在宅医療支援への薬剤師の参画体制情報の整備とシステム構築の評価

JA長野厚生連佐久総合病院 青木 悠 先生

地域・在宅医療の先進エリアである長野県佐久地域において、在宅薬剤業務への薬剤師の介入が少ない現状であった。その要因として訪問応需可能な薬局の情報不足（届出情報と実際の応需可否に乖離）、在宅医療における薬剤師の役割および業務内容に対する認知度の低さ、顔の見える関係づくりなどの地域医療体制情報に問題があり参画促進に向け対策を講じた。

薬業連携・情報共有を図るため病院・保険薬局の薬剤師で在宅医療推進委員会を立ち上げ、地域の全保険薬局を対象に在宅医療調査を実施し、結果をもとに在宅医療支援薬局マップ（訪問応需可能な薬局や訪問可能範囲・時間）、薬局毎の医療用麻薬在庫品目一覧を検索・閲覧できるシステムを構築し、佐久薬剤師会のホームページに掲載した。また在宅薬剤業務の周知・理解を図るためにパンフレットを作成・配布したほか、多職種との勉強会などを開催した。その結果、医療機関からの訪問依頼は1施設（平成21年）から6施設（平成25年）、在宅薬剤管理指導の算定も2薬局から18薬局にそれぞれ増加し、麻薬小売業者間での譲渡/譲受契約を締結し5件で行われ、安定かつ迅速な供給体制を構築でき有用であった。訪問応需可能な薬局の情報把握、在宅薬剤業務の周知、多職種連携による情報共有といった地域医療体制情報の整備は、薬剤師の在宅医療の参画を促進させることが示唆された。

準グランプリ受賞者インタビュー

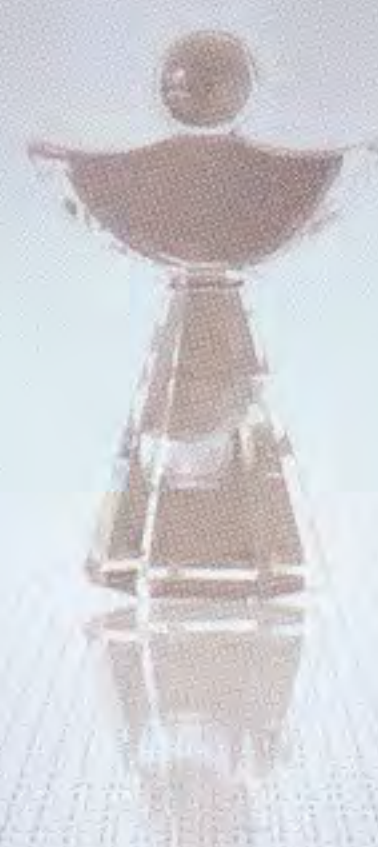
Q 受賞されてのご感想をお教えてください

在宅医療推進委員会が推進した、在宅医療支援薬局マップ（患家の所在地・かかりつけ薬局から訪問応需可能な薬局を選定）の運用、パンフレットの作成・配布、在宅医療勉強会・研修会などの活動により、相互の情報共有を図ることで顔の見える多職種連携に繋がったほか、薬剤師の在宅薬剤業務への周知・理解が得られたことから訪問依頼が増え、在宅薬剤業務が促進したことを評価いただいたと思います。多職種協働の薬剤マネジメントは在宅療養者とその家族が正しく服薬できるように援助し在宅療養を継続するために重要な役割を担っており、質の高い在宅医療支援を提供できるように研鑽していきたいです。本取り組みに御協力頂いた佐久薬剤師会、在宅医療推進委員会など関係各所に深く感謝申し上げます。

Q 今後の取り組みについてお聞かせください。

地域全体で在宅医療支援するために、混注業務を応需できないエリアへの対応、在宅基幹薬局が対応できない場合に臨時で他の薬局がサポートできる連携体制の構築も進めていきたいと思っています。チーム医療の一員、また地域の薬剤師として専門性を発揮し、適切な薬物療法・服薬管理支援を提供する医療の担い手として、今後もQuality of life向上に貢献していきたいと考えています。





BIファーマシストアワード2015 — 薬剤師が実践する患者中心の医療 受賞作品



病棟業務時間を見直した「モーニング・ランチタイム服薬指導」による
患者が服薬する際に薬剤師が行う直接的な服薬支援と薬学的介入

霧島市立医師会医療センター(鹿児島県)
岸本 真 先生



中小病院薬剤師ができる抗菌薬適正使用への介入
考え・足を運んで・伝える、抗菌薬のアクティブコンサルテーション

医療法人社団和光会 総合川崎臨港病院(神奈川県)
坪内 理恵子 先生

経口抗がん薬投与計画書での双方向の情報共有化
- 疑義照会システムを利用した薬薬連携 -

関西電力病院(大阪府) 濱口 良彦 先生

BIファーマシストアワード2014 — 薬剤師が実践する患者中心の医療 受賞作品



「往診前訪問による、患者中心の薬物療法の実践」

サンキュードラッグ桃園薬局(福岡県) 高橋 俊輔 先生



「不眠症治療における薬剤師の役割
～チーム医療による共同管理の取り組み～」

平松内科・呼吸器内科小牧ぜんそく睡眠リハビリクリニック(愛知県)
伊藤 光 先生

「『術後せん妄』発症予防ならびに
発症率低下に貢献する薬剤師業務の展開と実践」

岡山大学病院(岡山県) 北村 佳久 先生

BIファーマシストアワード2013 — さらなるチーム医療の実践 受賞作品



「吸入療法の地域連携
～ファーマシューティカルケアの担い手として薬剤師がすべきこと～」

群馬大学医学部附属病院(群馬県)
小野 理恵 先生



「チーム医療の中の在宅薬剤管理指導業務の実践」
「ガン終末期在宅ケアに必要とされる薬剤師を目指して
～院外薬局薬剤師と病院薬剤師の協働～」

山梨市立牧丘病院(山梨県) 望月 正英 先生
医療法人鉄蕉会亀田総合病院(千葉県) 山野 裕 先生

BIファーマシストアワード2012 — 薬剤師による医療連携の実践 受賞作品



「携帯型心電計を用いた薬局薬剤師によるQT延長薬のリスク管理」

ひくま薬局(静岡県) 篠崎 幸喜 先生



「ハイリスク薬と新薬に焦点を当てた薬
- 薬連携による副作用シグナル検出システムの構築」

山口大学医学部附属病院(山口県) 古川 裕之 先生

「COPD(慢性閉塞性肺疾患)の早期発見と受診勧奨
～医療連携及び禁煙指導も含めて～」

マミー薬局(大阪府) 小川 きよみ 先生

BIファーマシストアワード2010 — チーム医療の実践 受賞作品



「医師と薬剤師とのスキルミックスによる学術支援業務の実践」

KKR高松病院(香川県) 浅田 智哉 先生



「介護療養病棟におけるチーム医療の実践」

特定医療法人原土井病院(福岡県) 伊藤 麻衣子 先生

「患者情報共有のためのお薬手帳の活用」

公園前薬局 暁店(東京都) 鈴木 則子 先生



BI ファーマシスト アワード 2017

あなたがアピールしたい
薬剤師としての取り組みを
発表しませんか？

募集テーマ：社会のニーズに対応した薬剤師業務の実践

趣旨) 今日、医療に対する社会のニーズはますます多様化しております。予防医療、先制医療、医療機関や地域における多職種協働でのシームレスな医療、介護など社会のニーズに対応した薬剤師の幅広い業務の実践をテーマとしました。

応募資格：以下の条件を満たす方

1) 日本国内外で薬剤師業務に従事する方 2) 所属施設の承認を得た方 3) 最終選考会(2017年3月5日(日)東京)にて研究内容を発表出来る方

賞金 グランプリ賞金50万円 準グランプリ賞金30万円 優秀賞賞金10万円

応募方法

(1) 応募用紙をホームページよりダウンロードし必要事項を記入

ホームページ：http://www.boehringer-ingenelheim.jp/research_development/awards_fellowships/bi_pharmacistaward.html

BI ファーマシストアワードで検索

(2) 応募用紙をE-mailにて送信後、応募論文を事務局へ提出(郵便、宅配等)

※ご提出いただいた応募用紙・応募論文は採否に係わず返却いたしませんので予めご了承ください。

応募締切日：2016年11月30日(水) 事務局必着

※応募用紙(E-mail)と応募論文あるいは総説(郵便、宅配等)両方の到着をもって受付完了となります。

事務局

〒141-6017 東京都品川区大崎 2-1-1 ThinkPark Tower
日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社 BI ファーマシストアワード事務局
TEL：03-6417-2891 FAX：03-5435-2915
e-mail：BIPhAw@kaw.boehringer-ingenelheim.com
ホームページ：<http://www.boehringer-ingenelheim.jp/>



 **Boehringer
Ingelheim**